

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

「もっとウキを知りたい！」もいよいよ終盤にさしかかり、「ウキの形状、立ち上がりと水の抵抗—その1」ということで、これまでのまとめをしていきたい。

ウキの形状、各パーツのバランスによって、ウキの立ち上がり、水の抵抗がどのように変わるのかを「尽心作」の製作者である北村滋朗氏に紹介してもらおう。

第12回 ウキの形状、立ち上がりと水の抵抗（1）

はじめに

これまで、「尽心作 匠」の各タイプを釣り方別に解説してきた。各回で、ウキの形状、素材構成、各パーツのバランスによって、ウキの立ち上がりの違い、水の抵抗について、一定の説明を行ってきたが、まとめを行ってきたい。

ウキ形状の目安

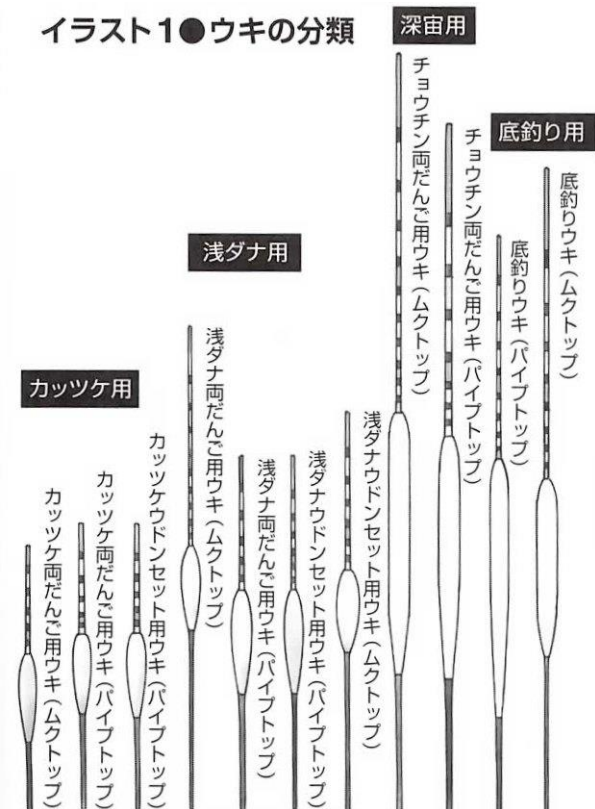
現在市販されているウキの形状は、脚の長さに多少の違いはあるものの、大まかに区分して、イラスト1のように分類される。

それぞれの形状やトップの長さ、太さには、それぞれ理由がある。

ウキ作者の方は、各釣法にあった最適な形状を模索し、製作している。

イラスト1

イラスト1●ウキの分類



(出典：別冊へら専科2、ウキ Bible)

イラスト1を整理すると、表1、表2のとおりとなる。

表1

深度	釣法	ボディの大きさ
1 m未満	カツケ	小 ↓ 大
1 m程度	浅ダナ	
1 mよりも深く底未満	チョーチン	
底	底	

*釣るタナが深くなるにつれて、ボディのサイズが大きくなる。

表2

エサ	トップ
エサが小さい、もしくは軽い、もしくは、トップの素材の比重を利用して、エサをなじませる。	細い、もしくは短い (バランスの底釣りを除く)
↓	↓
エサが大きい、もしくは重い、もしくは持たせる	太い、もしくは長い

*エサが大きくなる、もしくは重くなる、もしくは持たせるにつれ、トップの太さが太くなる、もしくは長くなる。→つまり、容積が増す。(ただし、バランスの底釣りを除く)

釣法により、脚の長さ等で多少の異なりはあるが、ウキの細分化に伴い、それぞれの釣法に合わせたウキがある。

反面、底釣りのウキはカッツケに使われることはほとんどないが、チョーチン・沖宙に使われることは、状況によって存在する。同様に、1 mの釣りにチョーチン・沖宙用のウキが使われることもある。つまり、隣の区分については、ある程度ウキの互換性があると考えることができる。

ウキ製作者は、各釣法のコンセプトを素材の選択や形状、各パーツのバランスで表現している。

このようにウキは細分化しながらも一定の互換性があり、また統一された基準というものが無い。現時点では、ウキ製作者それぞれの感性や考え方に任されているのが実情だ。

ウキの形状

ウキの形状は、水の抵抗とウキの立ち上がりにより決定されるが、近年では、くさび形、ツチノコ形、流線形の3種類に集約されつつある。



過去においては、逆くさび形もあったが、①立ち上がり始めるのが遅いこと、②アタリにメリハリがないことから、姿を消してしまった。

ではなぜ、逆くさび形は、①立ち上がり始めるのが遅い、②アタリにメリハリがないのか、くさび形との比較実験をまじえながら説明していきたい。

なお、この比較実験により、他の形状についても理解が深まると考えている。



キャプション：左：逆くさび形、右：くさび形



実験キット

前提条件：

ウキの仕様（くさび形と逆くさび形では、形状が異なるだけで、仕様は同じ）

ボディ：孔雀の羽根 50mm

脚：カーボン製 60mm、太さ 1.0mm→0.8mm→ゴム管差し込み部 1.0mm に削りだし

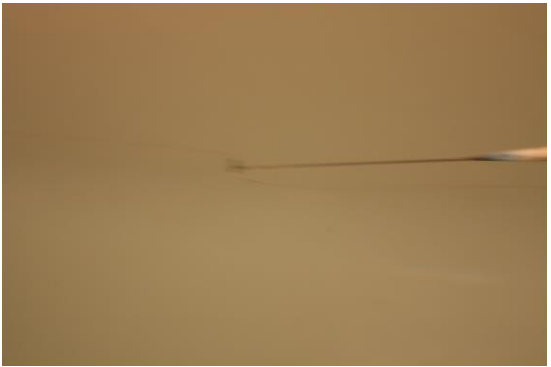
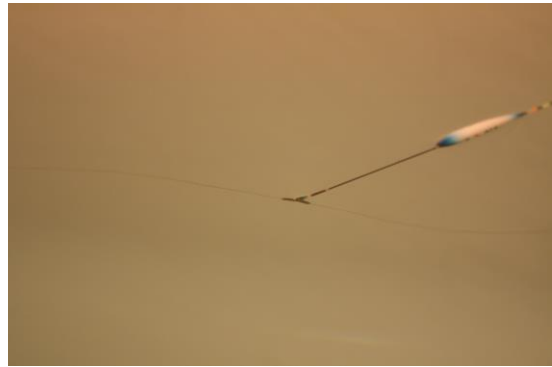
トップ：ポリカーボ製細パイプ、太さ 1.4mm→0.8mmテーパ付き

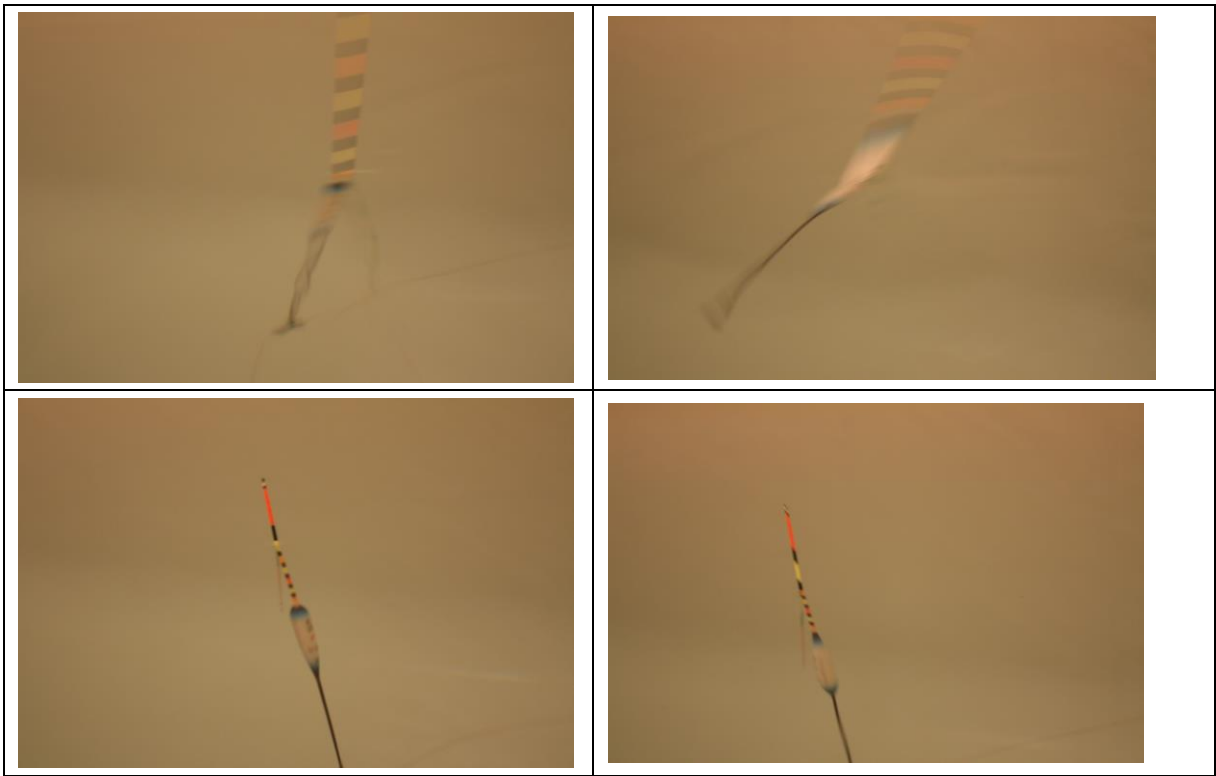
左下：くさび形のおもり 0.68g

右上：逆くさび形のおもり 0.73g

仕掛け：ハリス 8cm、アスカ 6号、ウキ下からおもりまで 30cm、浴槽で実験

(1) 実験 1：立ち上がり比較

くさび形	逆くさび形
	



実験結果をイラストで解説すると、以下のようになる。

イラスト 3

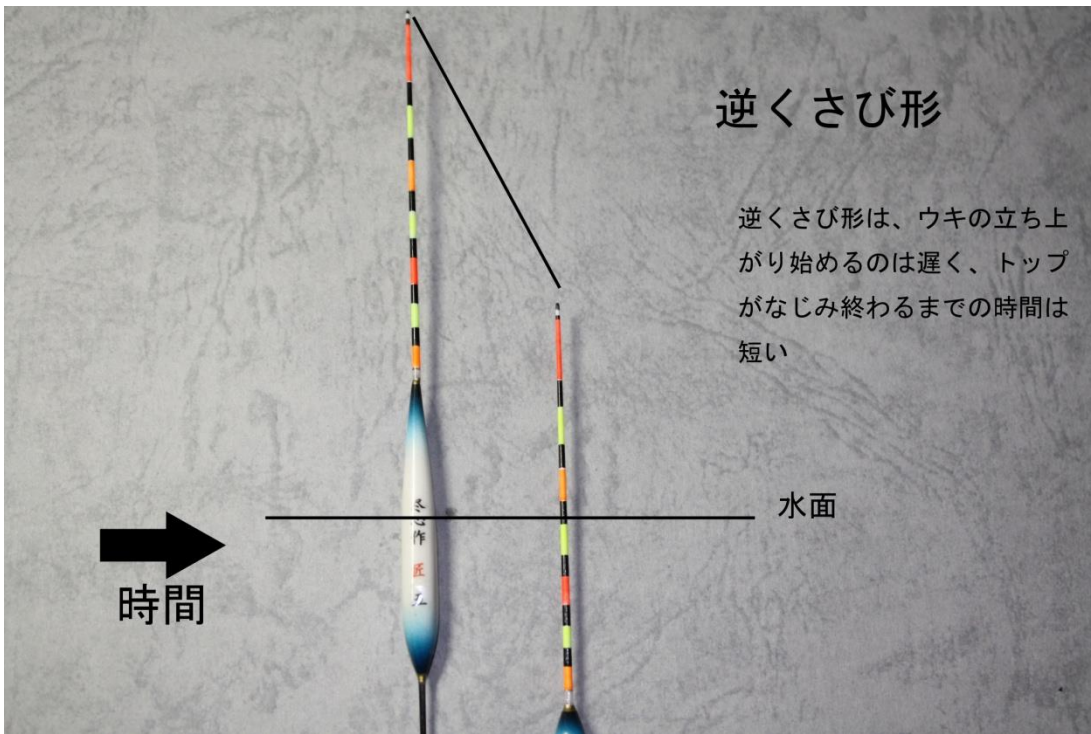
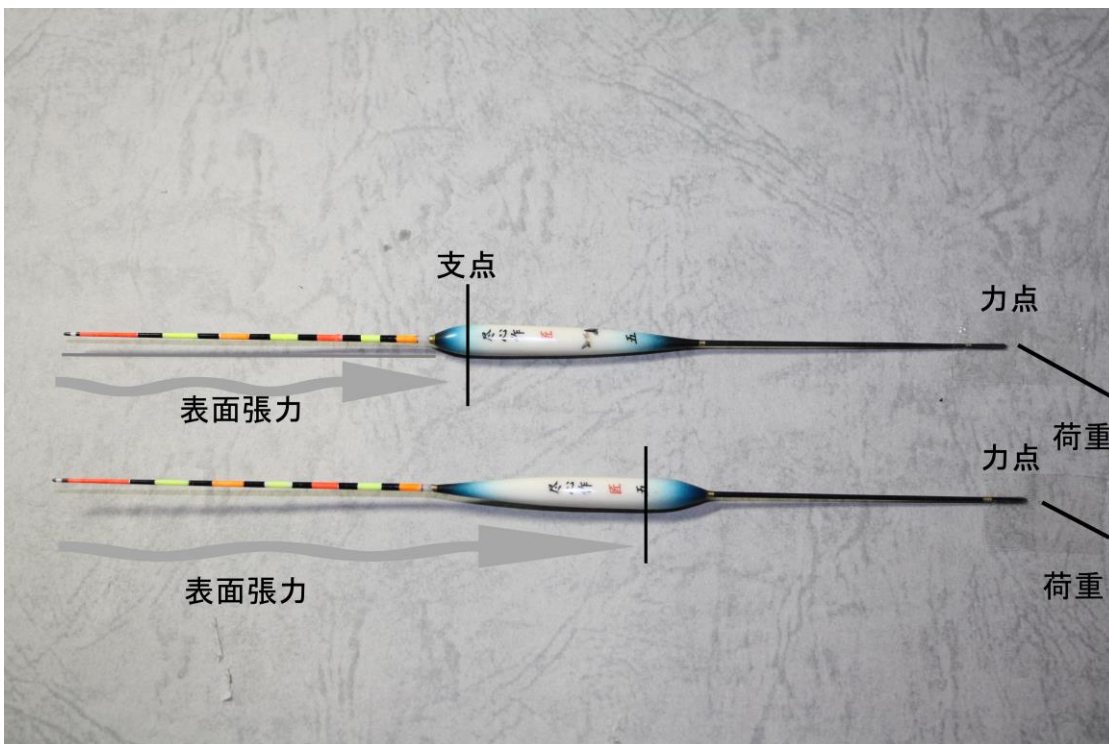
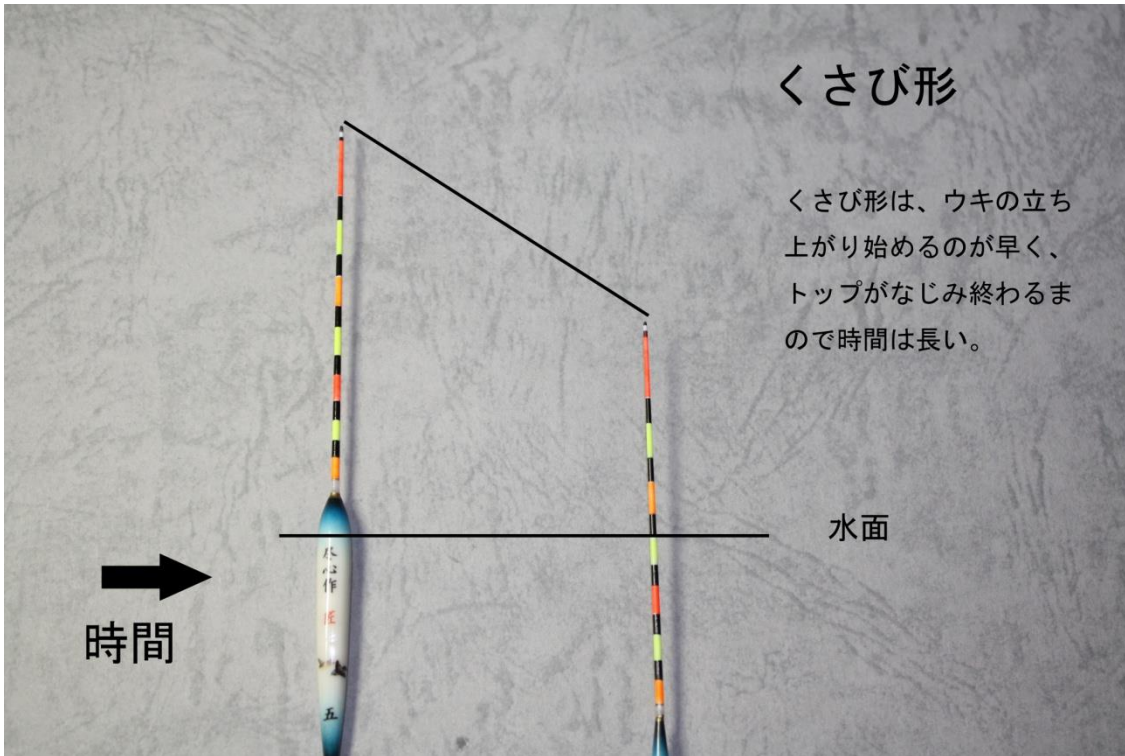


イラスト 4



- *くさび形は、テコの支点がボディ肩側にあることから、オモリが高い位置で立ち上がり始める。
- *逆くさび形は、テコの支点がボディ脚側にあり、テコ作用が働かない。さらに、表面張力もくさび形よりも大きいことから、オモリが垂直に近くなると、ウキが立ち上がり始めない。
- *くさび形は、ボディ肩側を支点に立ち上がり、肩がやや出た所で静止し、しばらくしてなじみ始める。
- *逆くさび形は、ボディ脚側を支点に立ち上がり、立ち上がった後は静止することなく、一気になじみ

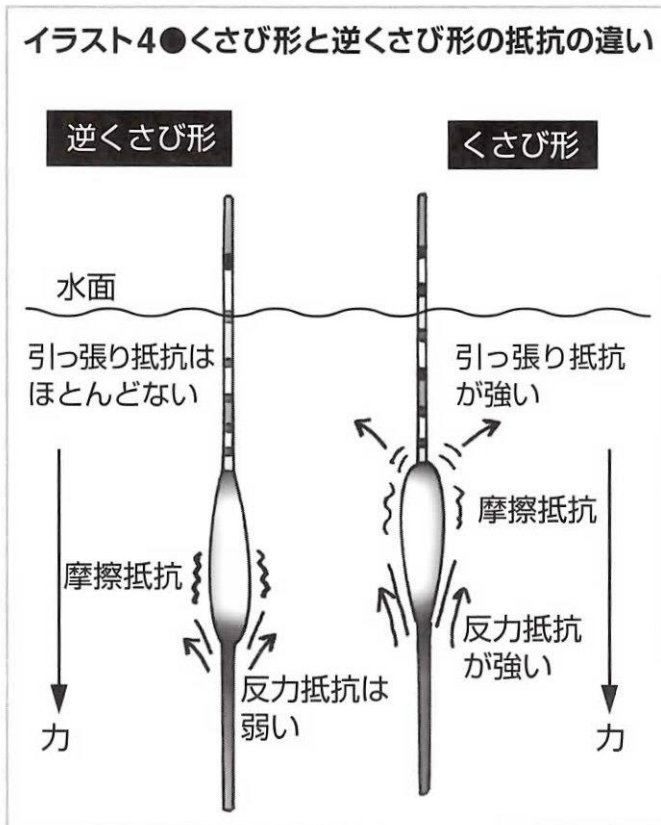
始める。

形状の違いによる水の抵抗の違い

(1) イラストによる形状の違いによる水の抵抗の違い

形状の違いによる水の抵抗をくさび形と逆くさび形に当てはめ、鉛直下向きにかかる力について、水の抵抗の違いを図示してみた。

イラスト 9



(出典：別冊へら専科2、ウキ Bible)

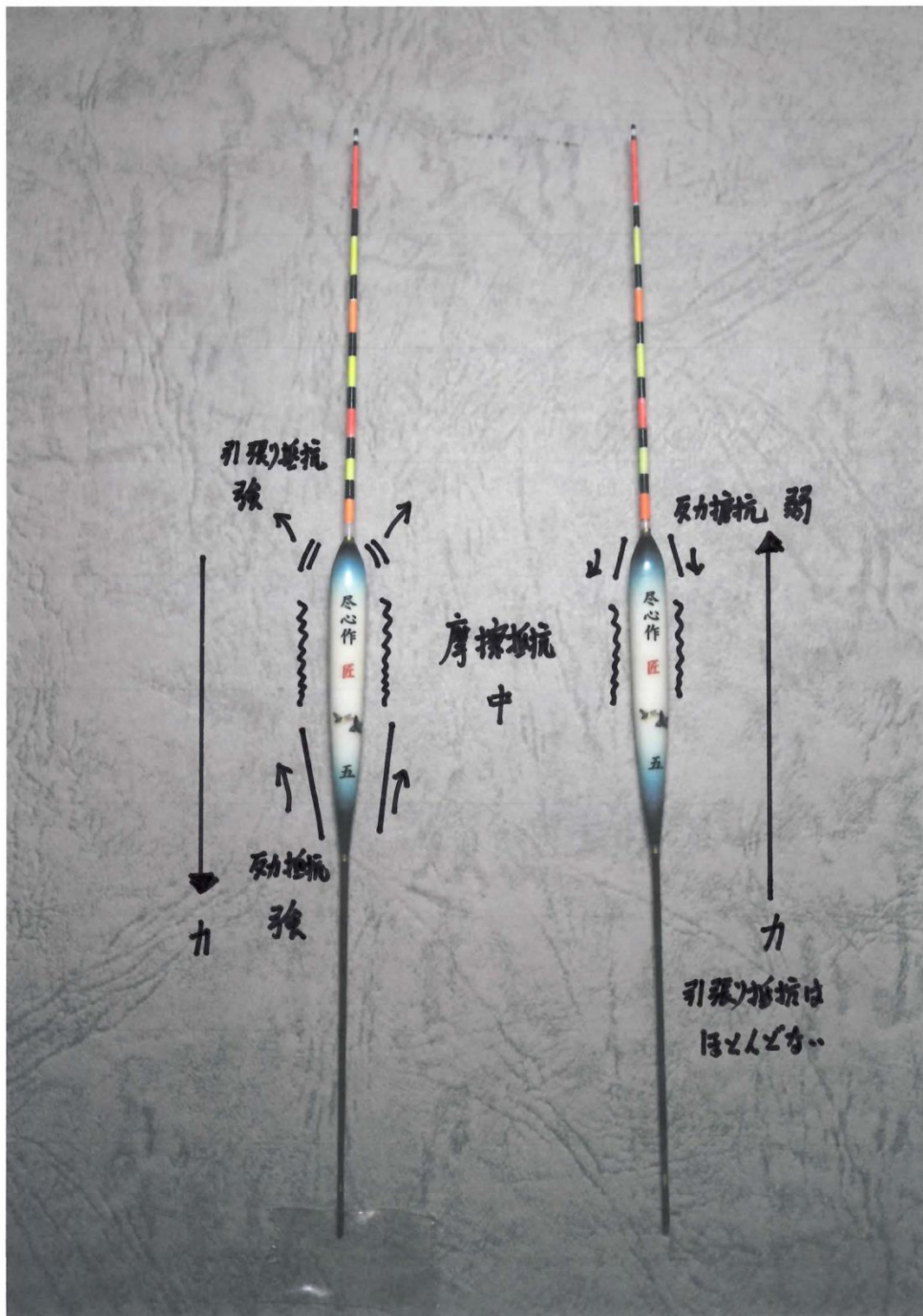
*くさび形は、引張抵抗、反力抵抗も強いことから、ウキは動きにくいですが、その抵抗ゆえにツンという明確なアタリを示す。

*逆くさび形は、引張抵抗がほとんどなく、反力抵抗も弱いことから、わずかな力でもウキは動く。反面、抵抗が弱いことから、メリハリのない「ズルー」としたアタリとなる。

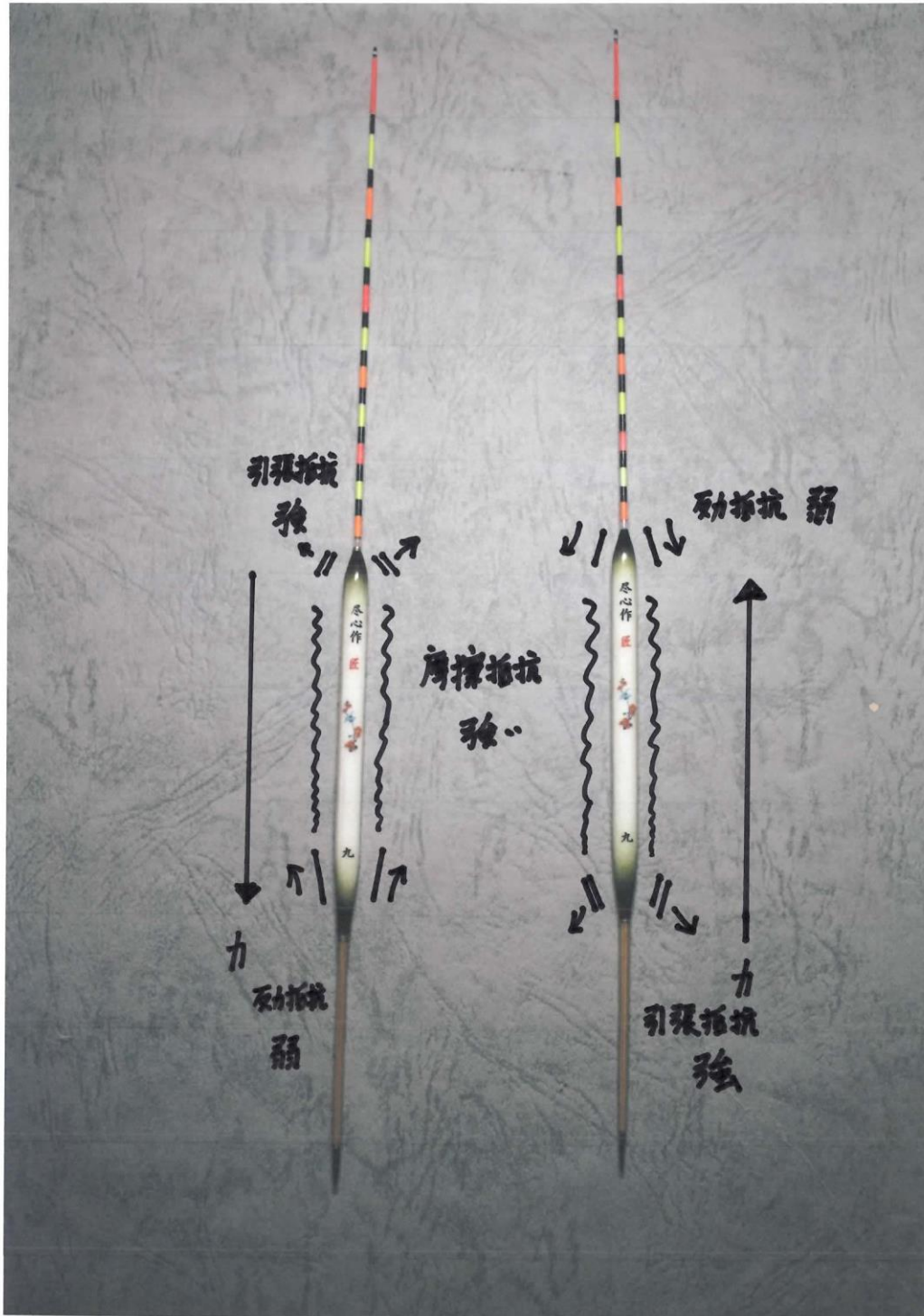
(2) 表による形状の違いによる水の抵抗の違い

くさび形、ツチノコ形、流線形の3種類について、形状の違いによる水の抵抗について、図示および表形式にして整理してみた。

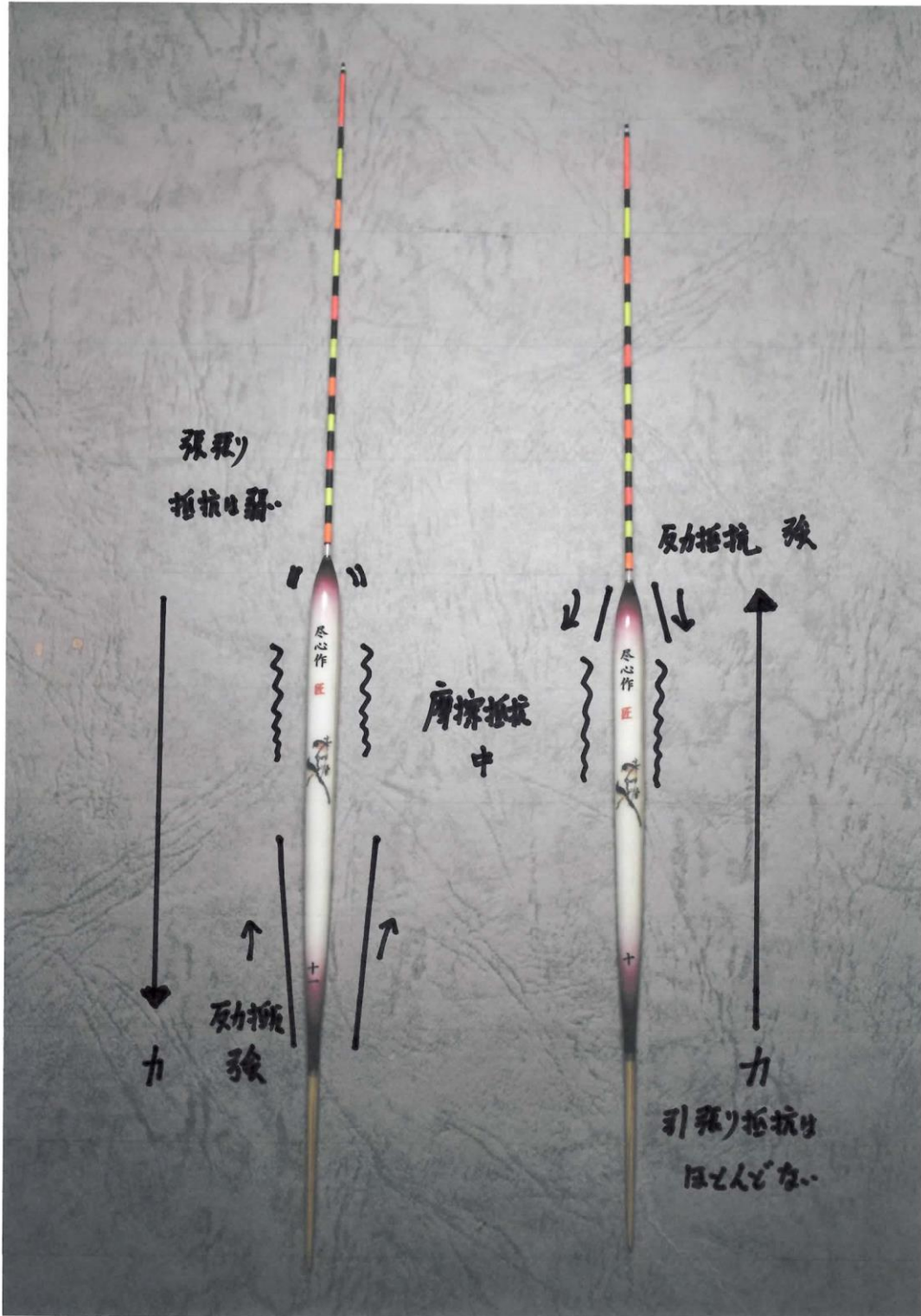
① くさび形における鉛直上向きと鉛直下向きの力での水の抵抗



② ツチノコ形における鉛直上向きと鉛直下向きの力での水の抵抗



③ 流線形における鉛直上向きと鉛直下向きの力での水の抵抗



④ 表6：鉛直下向きの動きに対して

	引張抵抗	摩擦抵抗	鉛直下向きの動きに対する圧力抵抗
くさび形	強い	中	強い
ツチノコ形	強い	強い	弱い

流線形	弱い	中	強い
-----	----	---	----

⑤ 表 7：鉛直上向きの動きに対して

	引張抵抗	摩擦抵抗	鉛直上向きの動きに対する圧力抵抗
くさび形	弱い	中	弱い
ツチノコ形	強い	強い	弱い
流線形	弱い	中	強い

宙釣り用のウキと底釣り用のウキの違いについて

形状の違いに伴う水の抵抗の違い、それによるウキの動きの違いの代表的な例について、解説している。

宙釣り用のウキの代表的な形状はくさび形であり、底釣り用のウキの代表的な形状は流線形である。

宙釣り用のウキと底釣り用のウキでは、アタリの取り方が異なる。

具体的には、両ダンゴの宙釣りでは、さわりながらなじみ込んだ瞬間にツンとあたるのが、理想とされてきた。

底釣りでは、落ち込みのさわりを重視せず、なじみ方を早くして、なじんでトップが戻ってツンとあたるのが、理想とされてきた。

最近では、上記の理想に反する釣り方、例えば深宙釣りの延長のような追わせる底釣りもあるが、上記のアタリが基本パターンとして認識とされている。

ウキについても、宙釣り、底釣りにおける理想のアタリを演出するための、その形状が追求されてきた。

(1) 宙釣り

- ①ウキの立ちを早くするために、肩の絞りをきつくする。(支点をトップ側にする。)
- ②ウキの安定性を確保し、風流れに対応するために、脚を長くする。
- ③脚を長くすることにより、支点がトップ側に移動し、ウキの立ち上がりが早くなる。

(2) 底釣り

- ①ウキが立ち上がり始めるタイミングを早くする必要はなく、肩の絞りをゆるやかにして、立ち上がり始めるのは遅いが、なじみ込みはすばやい。これにより、落ち込みでの余計なさわりをださせない。
- ②エサが底にあり、風流れによる影響を受けにくいことから、脚を長くする必要がない。

宙釣り用のウキを底釣りに使用すると、余計なさわりを伴いながらなじみ、ゴツゴツしたさわりが出て、いきなりトップが上がってしまうような動きとなる。

底釣り用のウキは、打ち込んだ後、一拍おいて立ち上がり、すつとなじみ込んだ後、フワッとトップが戻り、「くるぞ」という期待感を抱かせる動きが出なければならない。それにはやはり、なで肩の流線形で、脚の短い形からこそ演出されるのではないだろうか。

以上